

令和2年度 園芸特産業関係功労者表彰 受賞者功績概要

1 加藤 朋幸（飯田市）

24歳で後継者として就農後、農業技術体系に掲載される埼玉県の前井源典氏に、高品質安定多収技術を学び、その技術を南信地域で「前井会」を組織し、その技術を広めた。

また当時課題であった日本なし「幸水」の低収量を解消するため、県南信農業試験場と協力し、新梢管理技術など地域にあった高品質多収栽培の技術の組み立てを行った。

ぶどうでは、年間降水量が多く栽培が難しいと言われた南信地域に30年前いち早く導入し、独自で考案した「レインカット棚栽培」を開発し、地域へ普及したほか、「シャインマスカット」も産地でいち早く栽培に取り組み、その栽培事例は「シャインマスカット栽培マニュアル・優良栽培事例集」にも掲載されている。

日本なし、ぶどうともに、モデル園として全て公開し、新規就農者等経験が浅い生産者に丁寧に指導を行うなど次世代を担う若い農業者の育成と長野県果樹産業の発展に尽力された。

2 佐々木 信幸（南佐久郡佐久穂町）

27歳で後継者として養殖業の道に入り、信州サーモンや信州大王イワナなど特産魚の生産振興に努めてきた。（現職：「八千穂漁協代表」、「信州大王イワナ振興協議会副会長」、「佐久養殖漁業協同組合理事」他）

信州サーモンの養殖に当初から一貫して取り組み、臭みがない高品質な鮮魚（生）での販売のほか加工品も手がけ、信州サーモンの県内外への普及および知名度の向上の他、地元異業種とのコラボによる商品開発など、地域の内水面養殖業の発展に尽力された。

3 寺平 栄（木曽郡木祖村）

昭和54年に就農して以来、地域ブランド野菜である「御嶽はくさい」の安定生産に向け、優良品種の積極的な導入の他、直播栽培など栽培方法の確立に向け取り組んできた。

また、夏場のはくさい価格の落ち込み時期への対策として、加工用向けキャベツの生産にいち早く取り組み、他の生産者の模範となっている。

平成26年のはくさい予冷施設改修や、平成27年の出荷ダンボール資材の見直しに当たって、JA木曽野菜部会長等の立場で生産者の先頭に立ち、導入等を行った。

また、長野県里親農業者に登録し研修生を就農支援したほか、木祖村人・農地プラン策定や、JA木曽理事、木祖村農業委員などの木祖村農業の発展に尽力された。

4 永原 志朗（塩尻市）

台木を活用した自根樹栽培の先駆者で、当時M26自根台木に取り組み、取り木ほ場を設置し、台木を増殖、M26自根の栽培方法を研究した。その後、M9台木の自根、高密植栽培へ県内でも先進的に取り組み、栽培技術の確立を図り、その技術を県内の生産者や技術者に対して、自身のノウハウを惜しみなく伝えるなど、長野県果樹産業の発展に尽力された。

5 中野市農協 ぶどう部会

中野市農協ぶどう部会は昭和41年に設立され、巨峰（種あり）主体の産地で平成6年には販売金額42億円弱であったが、その後ぶどうの販売価格の低迷や消費減退等により大きく落ち込み、平成23年には21億円と半減。平成18年にぶどう特別対策委員会を立ち上げ、①巨峰の種なし化の組織的な推進、②種なし品種（シャインマスカット、ナガノパープル等）の積極的導入、③販売期間の長期化、等に取り組み、令和元年には販売金額50億円超とV字回復。部会員の平均年齢は50歳代と若く、新規就農者も多い。平成28年度には日本農業賞大賞を受賞するなど、功績も大きく長野県果樹産業の発展に尽力された。